

審査委員長 中西進（田辺聖子文学館館長
高志の国文学館館長）

事改まって言うのもおかしいが、そもそも「かく」という動作は、一体何を意味するのだろうか。そのことを何も考えないで、文字や絵をかいいたり、義理をかいいたり頭をかいいたりしては、おちおち小説もエッセイも書けないのではないか。

どうも、「欠」（凹形をつくる）や「搔」（引つ搔く）が本来の日本語の「かく」に当てはまる用字で、文字などを「書」（筆で定着させる）くとするのは、本来の日本語に対してすこし使い方が違う。文字や絵も最初は「欠く」ことだったらしい。

つまり五世紀ごろ日本に文字が伝わってきた時に発生した書く行為は、縄文時代以来やってきた、粘土を欠いて模様をつけた、その行為と同じものだと、日本人は理解したのである。メソポタミアの、粘土板文字と同じように。

もちろんわたしは、だから今後「文字を欠く」と書こうと言うのではない。しかし小説にしろ詩にしろ論文にしろ、文字を紙に書きつづけていく行為は、あの縄文土器に縄文人がみごとに装飾をほどこしたのとひとしい、渾身の創造だったことを、いま思い出したのである。

かつて、異色の画家だった岡本太郎は縄文土器に驚き、その力を賛美した。それに魅せられた彼は、「芸術は爆発だ」という名言を残した。

文字をもたなかった縄文人たちは、へらで粘土にさまざまな図形をほどこした。線と円とを組み合わせて、直線と曲線をまじえて、多様な意味を実現させた。緩やかに流れる図形は、水であり雲であり、また人生でもあろうと、かつて書いたことがある。

彼らは欠くことで、事柄を具象化して倦まなかったのである。

そして五世紀以降、日本人は中国から文字を教えられ、この使い方に、従来土器に用いてきた「かく」手段を相当させ、さらには文字に用いる正当な「書」という漢字を当てるようになったが、しかし粘土を欠いていた心組みを、忘れてはいけないだろう。

ペンをへらのように使って、紙を粘土と心得て、一かき一かき、原稿用紙を埋めていきたいものだ、わたしは思う。